

## 内容

第1章 調査の概要 .....	2
1. 背景 .....	2
2. 目的 .....	2
3. 調査方法 .....	2
4. 分析方法 .....	3
第2章 クロス集計の結果 .....	4
1. 各年代と現在の読書活動のクロス集計 .....	4
(1) 年代×現在の読書活動 .....	4
(2) 年代×子供の頃の読書活動 .....	8
2. H25年調査とH30年調査の結果を用いた経年比較 .....	10
第3章 読書媒体による現在の意識・非認知能力の違いの検討 .....	15
1. クラスタ分析による5分類 .....	15
(1) 各クラスターにおける男女差 .....	16
(2) 各クラスターによる年代差 .....	16
2. クラスタ×現在の意識・非認知能力 .....	17
第4章 考察 .....	19
単純集計の結果 .....	19
H25年度報告書を用いた経年比較 .....	19
読書媒体による現在の意識・非認知能力の違いの検討 .....	20
総合考察 .....	20
第5章 結論（おわりに） .....	22

# 第1章 調査の概要

## 1. 背景

読書活動は人生を豊かにするといわれている。先行研究では、読書活動（新聞を読むことを含む）と主観的幸福感 (subjective well-being) に正の関連が報告されている (e.g., Wang & Wong, 2011; Frey, Benesch, & Strutzer, 2005)。また、読書活動はメンタルヘルス、共感性、読解力、さらには寿命の向上など様々な指標にポジティブな効果を与える可能性が報告されている (Jeffcoat & Hayes, 2012; Mar, Oatley, & Peterson, 2009; Ritchie, S. J., Bates, T. C., & Plomin, R., 2015; Bavishi, Slade, & Levy, 2016)。

このように読書活動のポジティブな効果が示唆されている一方で、大学生の読書冊数や読書時間が減少傾向にあることが報告されている (平山, 2015)。また、小中学生も国の取り組みにより、朝の読書活動などの取り組みにより実施率や時間は向上しているものの、自分から進んで読書活動をしている者の割合は半数以下である (株式会社創建, 2019)。

読書活動により様々なポジティブな効果が得られるものの、その実施割合は低い状態であり、今後、読書活動を推進していく必要がある。加えて、近年はデジタル情報化社会の進展に伴い、スマートフォンやタブレットなどスマートデバイスの保有率は、年々増加している (総務省, 2018)。この点を踏まえ、文部科学省は昨年度、第四次「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」を公表し、スマートフォンなどのスマートデバイスの普及が子供の読書環境に影響を与えていることを示唆し、その影響に関する実態把握・分析を行う必要性を示している。しかしながら、その実態、および過去・現在の読書活動が与える影響に関する検討は十分でないといえる。

## 2. 目的

本調査は、子供の頃の読み聞かせや読書活動が、成人の読書活動や意識・非認知能力に与える影響を検証するとともに、読書活動の経年変化や情報環境の変化との関連などについて明らかにし、子供の読書活動の推進に資することを目的とした。今回の速報版では、一般成人の現在、過去の読書活動の実態を明らかにし、意識・非認知能力との関連を検討した。

## 3. 調査方法

マイボイスコム株式会社のモニターである全国の20～60代の男性2,500名、女性2,500名、計5,000名 (各年代で男性500名、女性500名) を対象に、2019 (平成31) 年2月中旬にインターネット調査を実施した (表1-3-1)。対象者は、住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数、国勢調査並びに労働力調査等を参考に、実社会の構成比に応じたサンプルの構成比となるようにした。また、調査に際して注意資源を割こうとしない行動を示す対象者を除外するため、DQS (Directed Questions Scale: Maniaci & Rogge, 2014) を組み込み、データの質を担保した。なお、インターネット調査であることから、対象者が日頃から電子メディアを利用している可能性があるため、結果の解釈には注意をする必要がある。

表 1-3-1. 本調査の対象者

	20代	30代	40代	50代	60代	合計
男性	500	500	500	500	500	2,500
女性	500	500	500	500	500	2,500
合計	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	5,000

調査内容は主に次の5点であった。今回の速報版では、以下のうちいくつかの項目を抜粋して分析し、整理した。

(1) デモグラフィックデータ

職業、学歴、年収、結婚の有無、子供の有無

(2) 子供の頃の読書活動

各年齢（小中高）期の読書量、読書経験（昔話や読み聞かせの経験など）、読書への関心を高める取組、選書方法、読み方、こだわり・熱中度、読書ジャンルの変遷など

(3) 現在の読書活動

読書好き、読書冊数、読書時間数、忘れられない本、読書の目的、メリットなど

(4) 現在の資質・能力（意識・非認知能力）

経済産業省は、人生100年時代を主体的に学び抜く力として、考え抜く力、前に踏み出す力、チームで働く力で構成される社会人基礎力を提唱し、その重要性を指摘している（経済産業省, 2018）。本調査では、先行研究および上記の指摘を踏まえ、自己理解力（「今の自分が好きだ」「自分には自分らしさがある」など自己肯定感を包含）、批判的思考力（「ものごとを順序立てて考えることが得意だ」など客観的、多面的、論理的に考える力、自分あるいは他者の意見をまとめる力、コミュニケーション力を包含）、主体的行動力（「分からないことはそのままにしないで調べる」など何事にも進んで取り組む姿勢や意欲）という3つの概念を用いて、読書との関連を検討した[自己理解力（Cronbach's  $\alpha = .84$ ）、批判的思考力（Cronbach's  $\alpha = .88$ ）、主体的行動力（Cronbach's  $\alpha = .85$ ）]。

(5) 現在の生活状況

生活満足度、自己啓発活動の有無、社会貢献意識、ボランティア活動

#### 4. 分析方法

第2章1. では、年代と現在の読書活動をクロス集計としてまとめた。第2章2. では、平成25年調査の結果と平成30年調査の結果において、重複する項目を年代ごとにクロスさせ、経年比較をした。

第3章では、読書時の使用ツールに関する回答項目をもとに、Ward法による階層的クラスタ分析により対象者を分類し、その違いによる現在の意識・非認知能力を比較した。具体的には、クラスタを独立変数、年齢を共変数、現在の意識・非認知能力を従属変数とした共分散分析を実施した。クラスタの主効果が有意な場合、Holm法による多重比較検定を実施した。また本調査では、変数間の効果の大きさを量的に表した統計量である効果量も含めて総合的に分析結果を解釈した。効果量にはCohen's  $d$  と  $\eta^2$  を用い、Cohen (1988, 1992) に倣いそれぞれの基準を、 $d$  は Small = 0.20 以上 0.50 未満、Medium = 0.50 以上 0.80 未満、Large = 0.80 以上、 $\eta^2$  は Small = 0.01 以上 0.06 未満、Medium = 0.06 以上 0.14 未満、Large = 0.14 以上と設定した。なお本調査においては、すべての分析内の検定における有意水準を5%水準とした。

## 第2章 クロス集計の結果

一般成人の現在および子供の頃の読書活動の特徴を明らかにすることを目的にクロス集計を行った。

### 1. 各年代と現在の読書活動のクロス集計

#### (1) 年代×現在の読書活動

##### ①1ヶ月に読む本（紙媒体）の量

1ヶ月に読む本（紙媒体）の量は、年代に関係なく半数以上または半数近くが0冊であった。

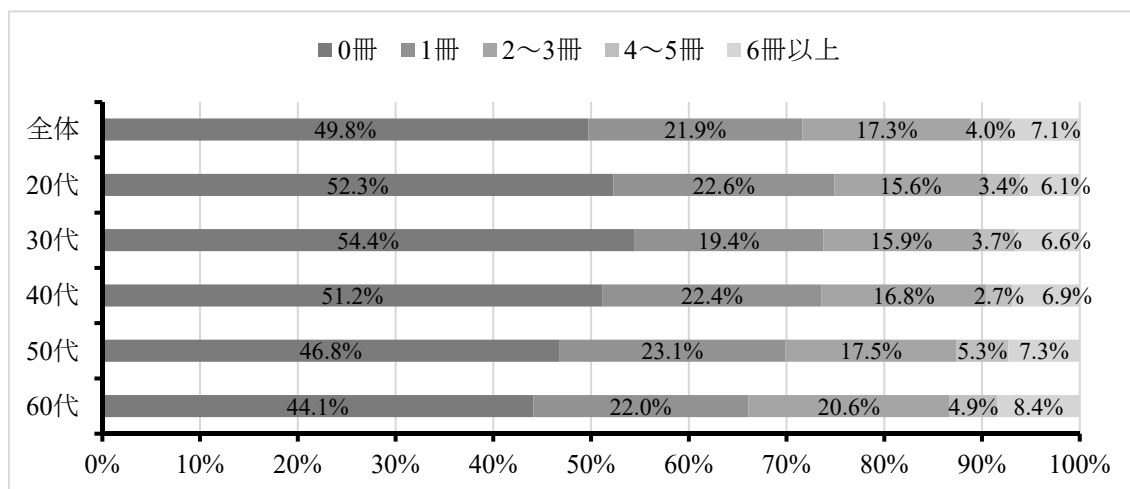


図 2-1-1. 「現在」1ヶ月に読む本（紙媒体）の量（q5-2）（各年代  $n = 1,000$ , 全体  $N = 5,000$ ）

##### ②1ヶ月に読むマンガの量

1ヶ月に読むマンガの量は、20代は半数近くが1冊以上読んでいるが、60代ではほとんどが0冊であった。

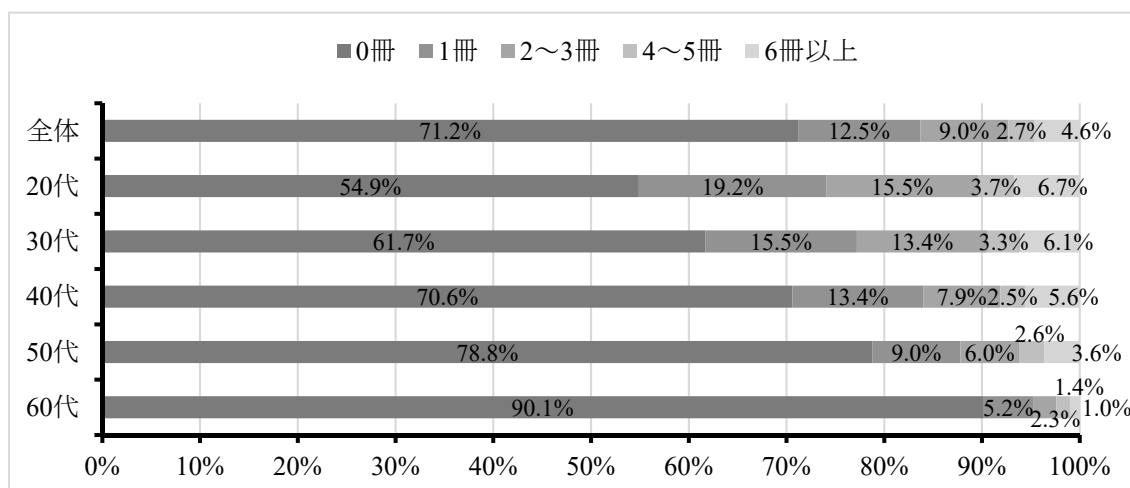


図 2-1-2. 「現在」1ヶ月に読むマンガの量（q5-2）（各年代  $n = 1,000$ , 全体  $N = 5,000$ ）

### ③1ヶ月に読む雑誌の量

1ヶ月に読む雑誌の量は、年代に関係なく60%以上が0冊であった。

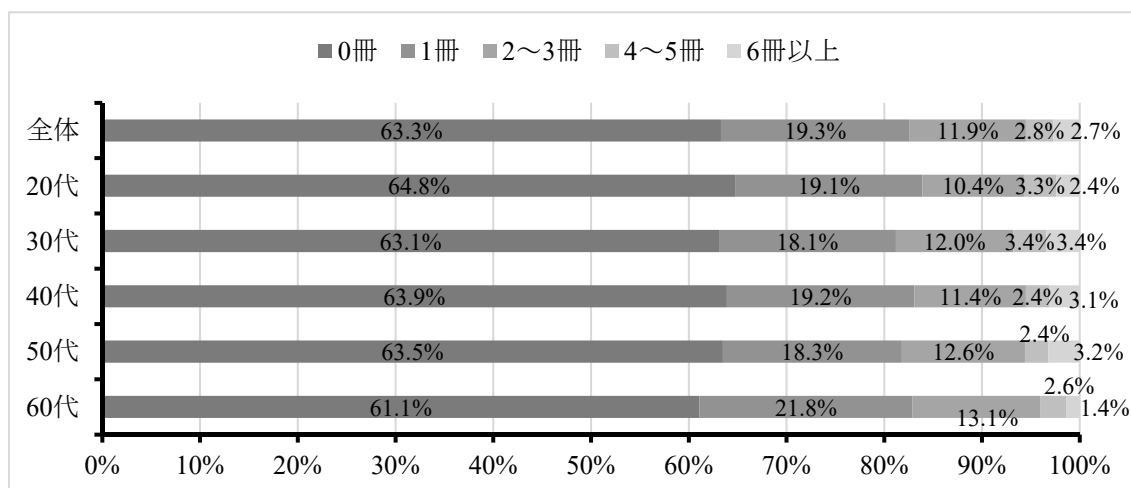


図 2-1-3. 「現在」1ヶ月に読む雑誌の量 (q5-2) (各年代  $n = 1,000$ , 全体  $N = 5,000$ )

### ④1ヶ月に読む電子書籍の量

1ヶ月に読む電子書籍の量は、年代に関係なく70%以上が0冊であった。また年代が低い場合、1冊以上の割合が高い傾向がみられた。

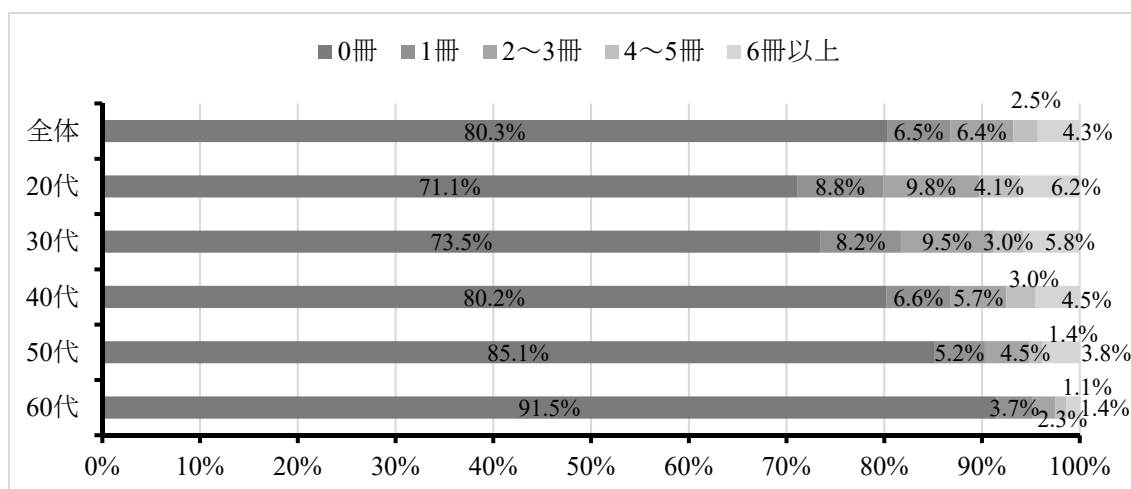


図 2-1-4. 「現在」1ヶ月に読む電子書籍の量 (q5-2) (各年代  $n = 1,000$ , 全体  $N = 5,000$ )

### ⑤1ヶ月に読むオーディオブックの量

1ヶ月に読むオーディオブックの量は、年代に関係なく90%以上が0冊であった。

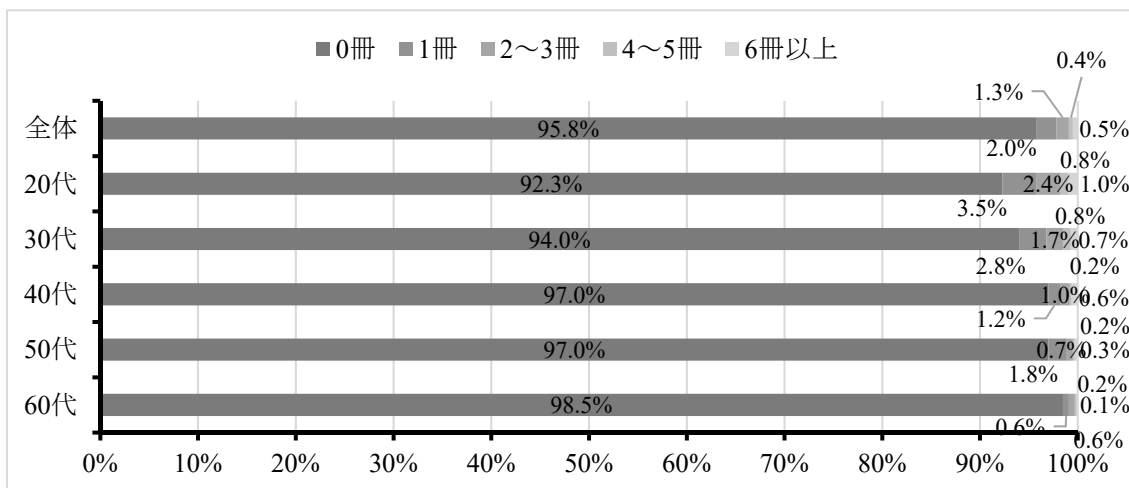


図 2-1-5. 「現在」1ヶ月に読むオーディオブックの量 (q5-2) (各年代  $n=1,000$ , 全体  $N=5,000$ )

### ⑥本（紙媒体）を使った1日当たりの読書時間

本（紙媒体）を使った読書時間は、20代から50代は半数近くが0分であるが、60代は60%以上が本を使った読書をしていた。

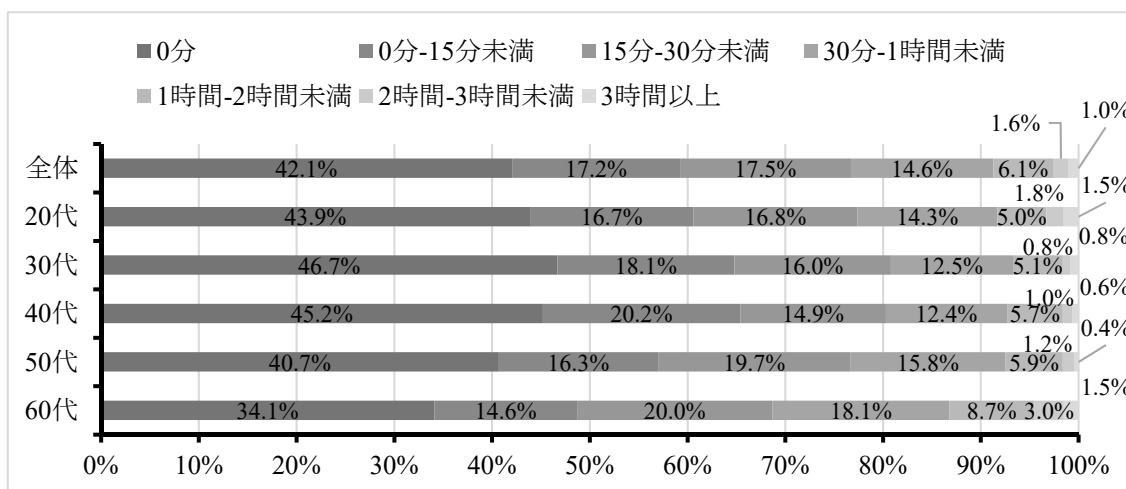


図 2-1-6. 「現在」本（紙媒体）を使った1日あたりの読書時間 (q6-2)  
(各年代  $n=1,000$ , 全体  $N=5,000$ )

### ⑦パソコンを使った読書時間

パソコンを使った読書時間は、20代から50代は半数以上が0分であった。60代は半数近くがパソコンを使った読書をし、3時間以上している者の割合が10%以上であった。

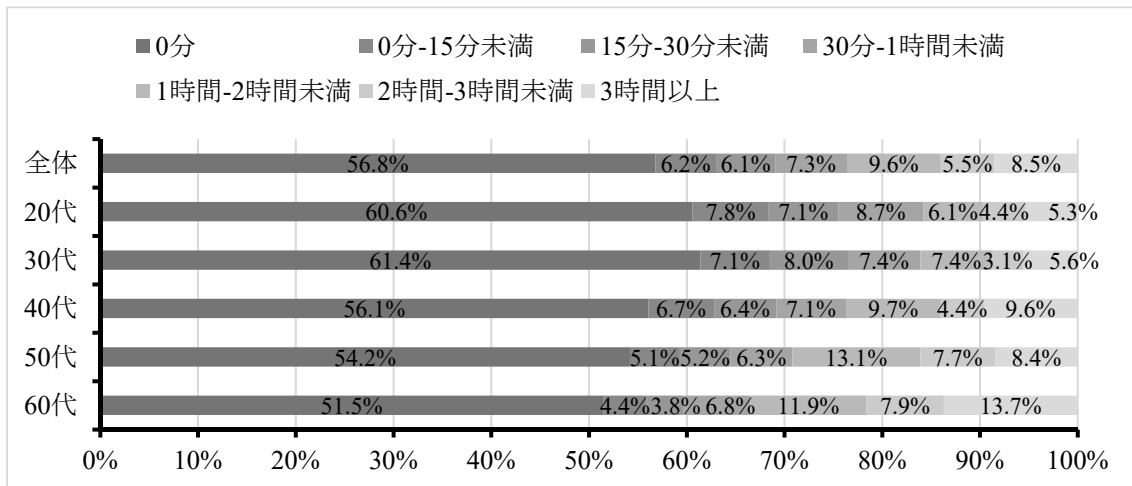


図 2-1-7. 「現在」パソコンを使った1日あたりの読書時間 (q6-2) (各年代  $n = 1,000$ , 全体  $N = 5,000$ )

### ⑧携帯電話、スマートフォン、タブレットを使った読書時間

携帯電話、スマートフォン、タブレットを使った読書時間は、20代を除き、半数以上が0分であった。20代は、半数以上が携帯電話、スマートフォン、タブレットを使った読書をしていた。

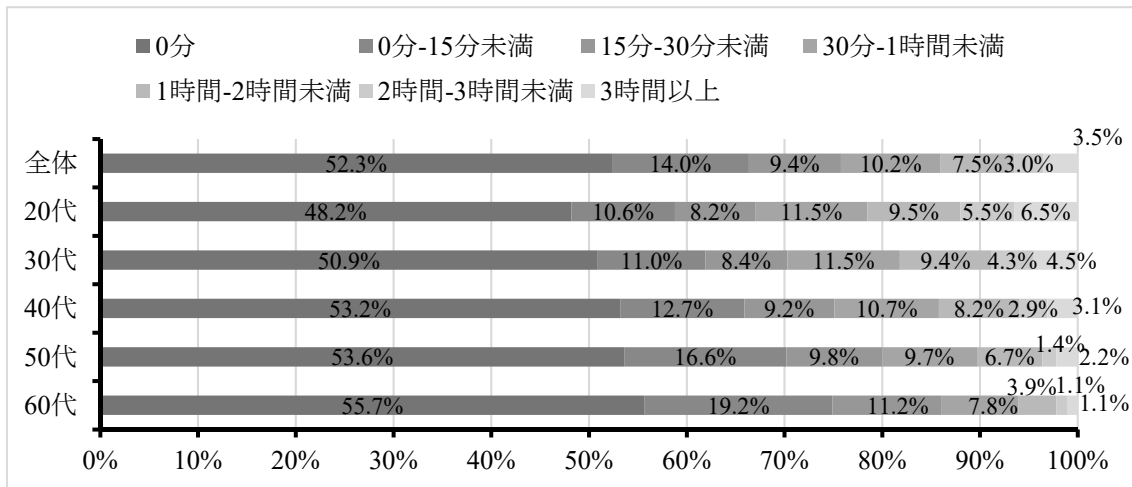


図 2-1-8. 「現在」携帯電話、スマートフォン、タブレットを使った1日あたりの読書時間 (q6-2) (各年代  $n = 1,000$ , 全体  $N = 5,000$ )

## (2) 年代×子供の頃の読書活動

### ①小学校高学年の頃、どれくらい本（紙媒体）を読んだか

年代に関係なく、読んだ（とてもよく読んだ、よく読んだ、読んだ）割合が、半数を超えていた。また、20代、30代は、本をほとんど読まなかった割合が60代の2倍近くみられた。

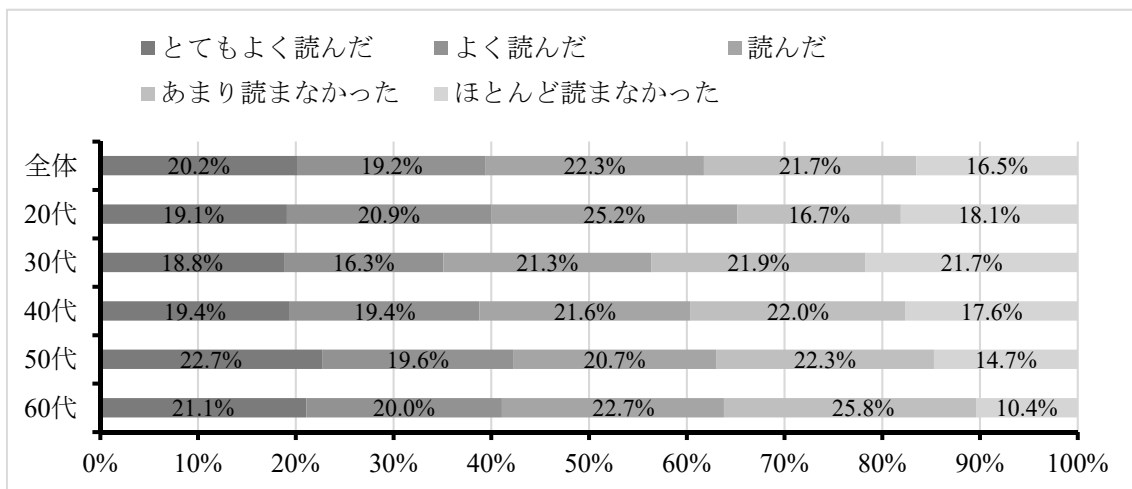


図 2-1-9. 小学校高学年の頃、どれくらい本（紙媒体）を読んだか（q6-9）

（各年代  $n = 1,000$ , 全体  $N = 5,000$ ）

### ②中学校の頃、どれくらい本（紙媒体）を読んだか

30代を除き、読んだ（とてもよく読んだ、よく読んだ、読んだ）割合が、半数を超えていた。20代から40代は、ほとんど読まなかった割合が20%以上であった。

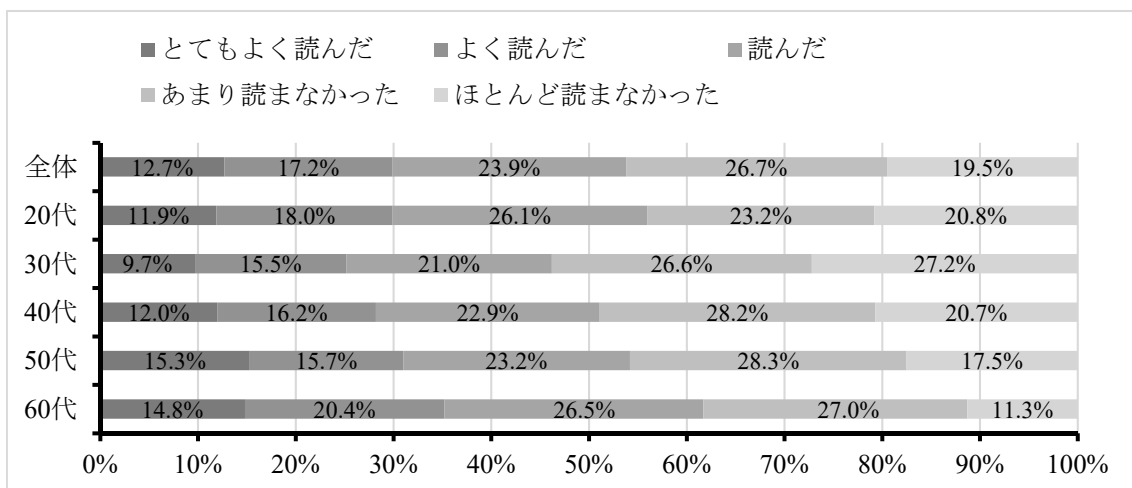


図 2-1-10. 中学校の頃、どれくらい本（紙媒体）を読んだか（q6-9）

（各年代  $n = 1,000$ , 全体  $N = 5,000$ ）



### ③高校の頃、どれくらい本（紙媒体）を読んだか

20代から50代は、読んだ（とてもよく読んだ、よく読んだ、読んだ）割合が、半数をきっていた。また、ほとんど読まなかった者の割合が20%以上であった。

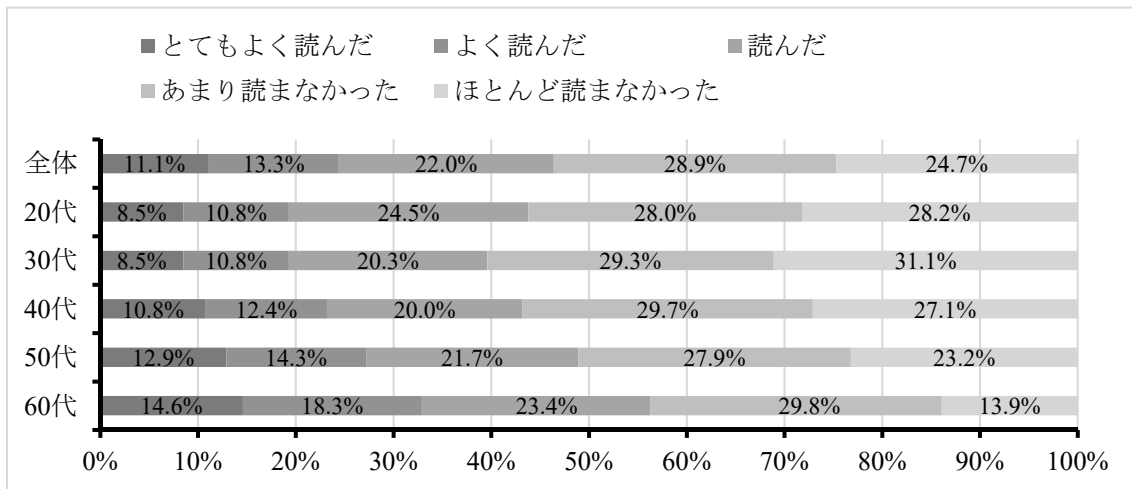


図 2-1-11. 高校の頃、どれくらい本（紙媒体）を読んだか (q6-9) (各年代  $n=1,000$ , 全体  $N=5,000$ )

## 2. H25年調査とH30年調査の結果を用いた経年比較

### ①1ヶ月に読む本（紙媒体）の量

1ヶ月に読む本（紙媒体）の量を経年比較すると、年代に関係なく0冊の割合が増えていた。特に、「0冊」と回答した割合が最も増えている年代は、20代（25.1ポイント増、52.3%）であり、平成30年で「0冊」と回答した割合が最も多い年代は、30代（54.4%）であった。

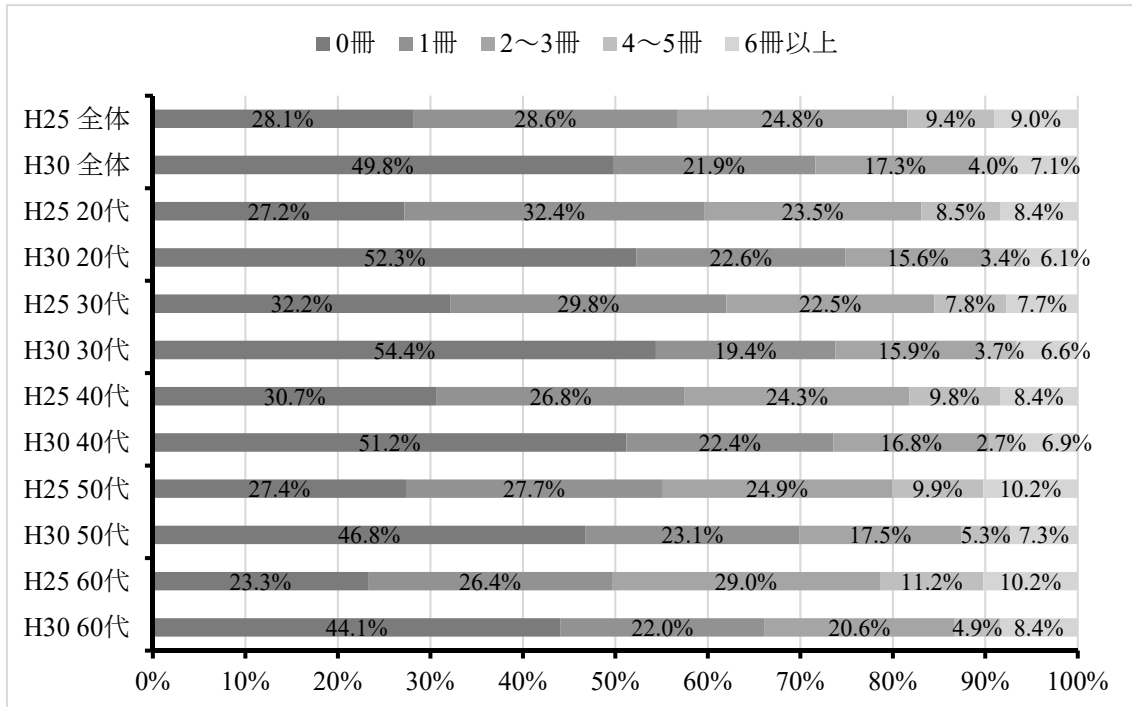


図 2-2-1. 1ヶ月に読む本（紙媒体）の量の経年比較

(H30 : 各年代  $n = 1,000$ 、全体  $N = 5,000$ 、H25 : 20代  $n = 1,049$ 、30代  $n = 1,056$ 、40代  $n = 1,051$ 、50代  $n = 1,053$ 、60代  $n = 1,049$ 、全体  $N = 5,258$ )

### ②1ヶ月に読むマンガの量

1ヶ月に読むマンガの量を経年比較すると、40代から60代は大きな変化がみられないが、20代から30代は0冊の割合が大きく増えていた。

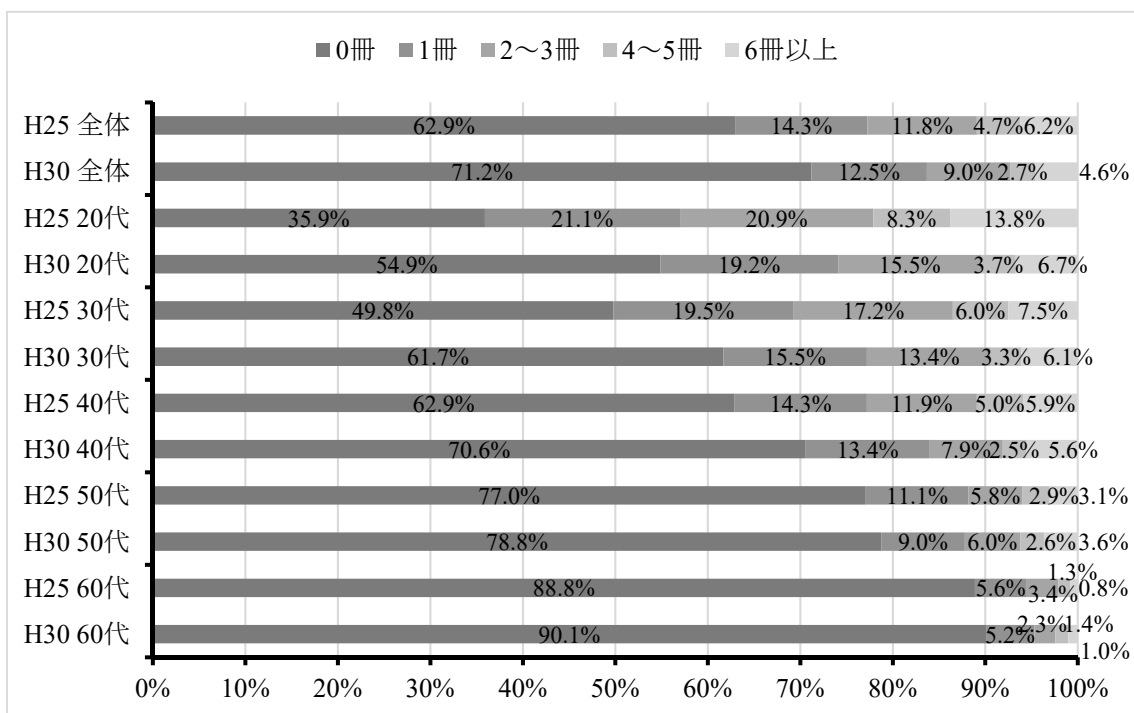


図 2-2-2. 1ヶ月に読むマンガの量の経年比較 (H30:各年代  $n=1,000$ 、全体  $N=5,000$ 、H25:20代  $n=1,049$ 、30代  $n=1,056$ 、40代  $n=1,051$ 、50代  $n=1,053$ 、60代  $n=1,049$ 、全体  $N=5,258$ )

### ③1ヶ月に読む雑誌の量

1ヶ月に読む雑誌の量を経年比較すると、年代に関係なく0冊の割合が大きく増えていた。

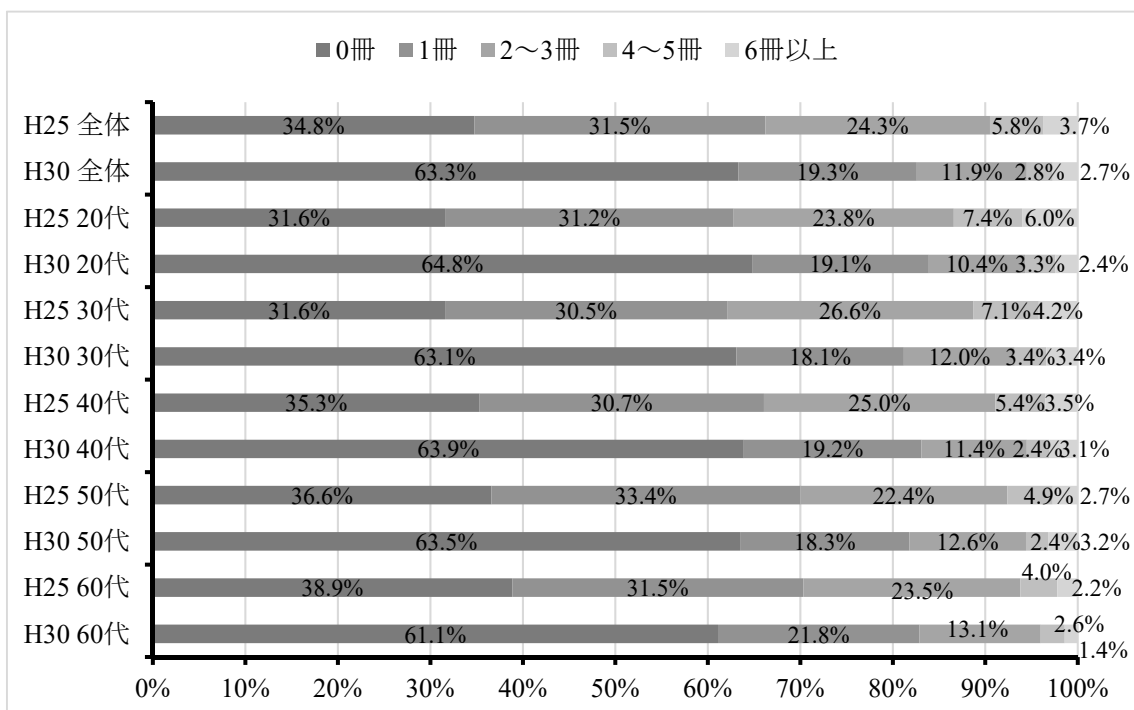


図 2-2-3. 1ヶ月に読む雑誌の量の経年比較 (H30:各年代  $n=1,000$ 、全体  $N=5,000$ 、H25:20代  $n=1,049$ 、30代  $n=1,056$ 、40代  $n=1,051$ 、50代  $n=1,053$ 、60代  $n=1,049$ 、全体  $N=5,258$ )

#### ④1ヶ月に読む電子書籍の量

1ヶ月に読む電子書籍の量を経年比較すると、年代に関係なく0冊の割合が減り、1冊以上の割合が増えていた。

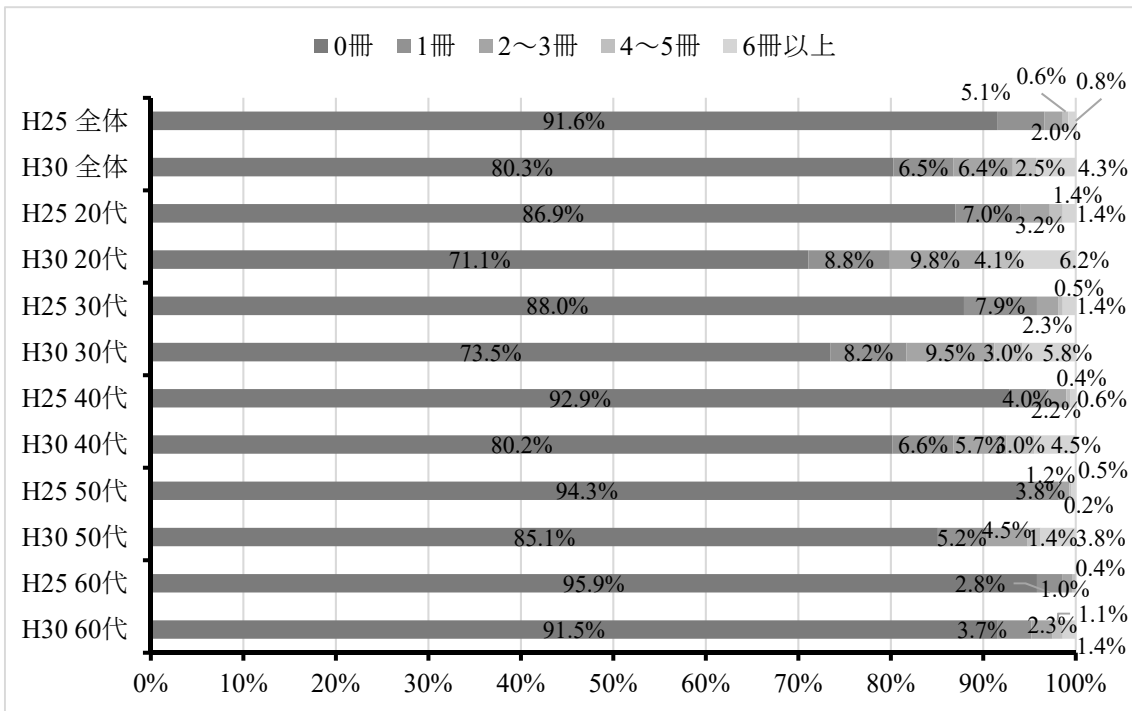


図 2-2-4. 1ヶ月に読む電子書籍の量の経年比較 (H30 : 各年代  $n=1,000$ 、全体  $N=5,000$ 、H25 : 20代  $n=1,049$ 、30代  $n=1,056$ 、40代  $n=1,051$ 、50代  $n=1,053$ 、60代  $n=1,049$ 、全体  $N=5,258$ )

#### ⑤本（紙媒体）を利用した1日あたりの読書時間

本（紙媒体）を利用した1日あたりの読書時間を経年比較すると、年代に関係なく0分の割合が増えていた。

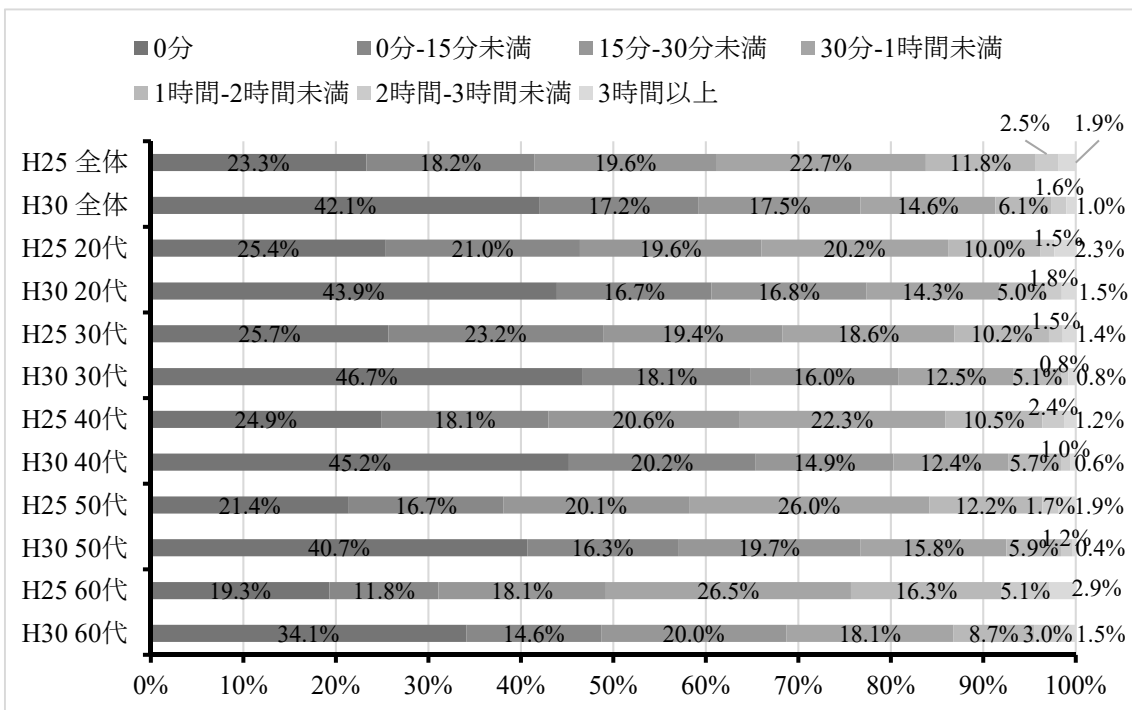


図 2-2-5. 本（紙媒体）を利用した1日あたりの読書時間の経年比較 (H30 : 各年代  $n=1,000$ 、全体  $N=5,000$ 、H25 : 20代  $n=1,049$ 、30代  $n=1,056$ 、40代  $n=1,051$ 、50代  $n=1,053$ 、60代  $n=1,049$ 、全体  $N=5,258$ )

### ⑥パソコンを利用した1日あたりの読書時間

パソコンを利用した1日あたりの読書時間を経年比較すると、20代と30代は、パソコンによる読書時間が減少していた。40代から60代は、パソコンによる読書時間が増加していた。

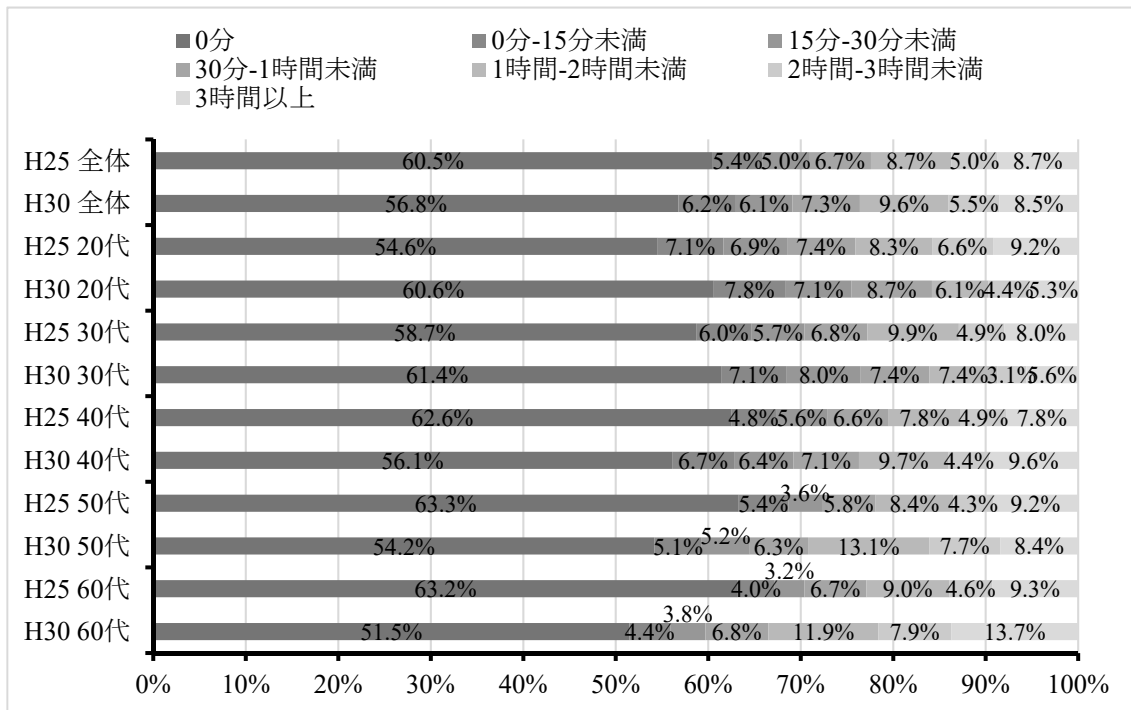


図 2-2-6. パソコンを利用した1日あたりの読書時間の経年比較 (H30: 各年代  $n=1,000$ 、全体  $N=5,000$ 、H25 : 20代  $n=1,049$ 、30代  $n=1,056$ 、40代  $n=1,051$ 、50代  $n=1,053$ 、60代  $n=1,049$ 、全体  $N=5,258$ )

⑦携帯電話、スマートフォン、タブレットを利用した1日あたりの読書時間

携帯電話、スマートフォン、タブレットを利用した1日あたりの読書時間を経年比較すると、年代に関係なく0分の割合が減り、15分以上の読書時間の割合が増えていた。

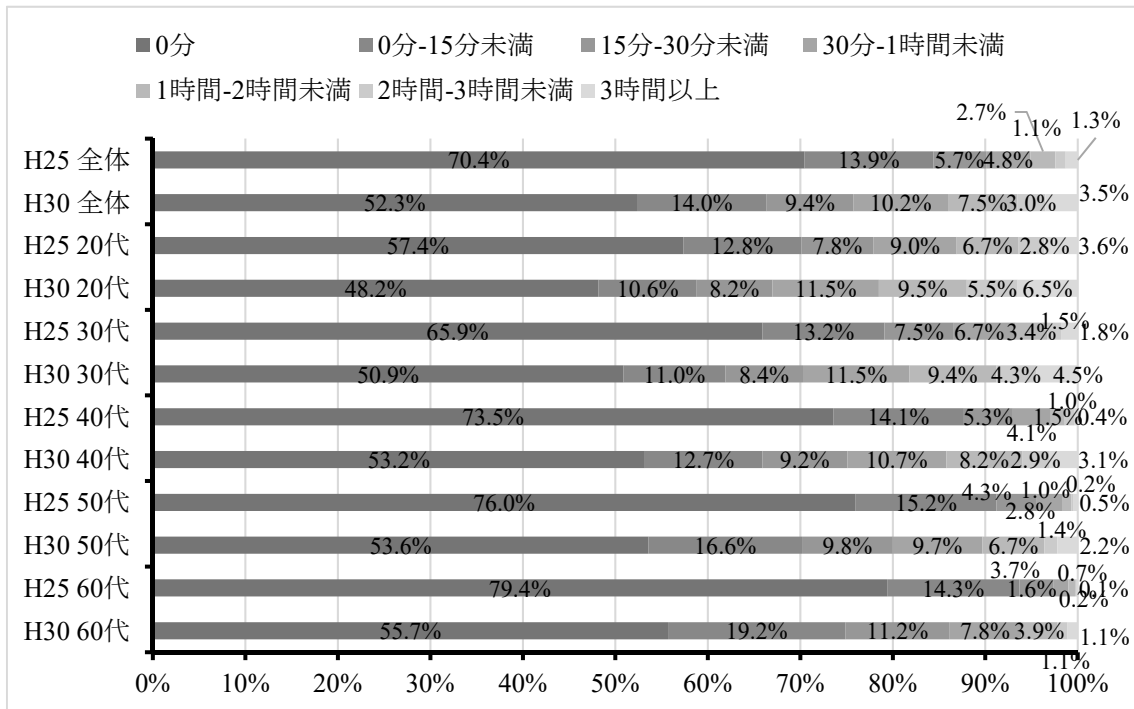


図 2-2-6. 携帯電話、スマートフォン、タブレットを利用した1日あたりの読書時間の経年比較  
 (H30 : 各年代  $n = 1,000$ 、全体  $N = 5,000$ 、H25 : 20代  $n = 1,049$ 、30代  $n = 1,056$ 、40代  $n = 1,051$ 、50代  $n = 1,053$ 、60代  $n = 1,049$ 、全体  $N = 5,258$ )

### 第3章 読書媒体による現在の意識・非認知能力の違いの検討

第2章2. より、紙以外のツールを利用した読書時間の変化が顕著であることを踏まえ、中心となるツールの違いによる現在の意識・非認知能力の違いを明らかにするため、使用ツールに関する質問への回答データを用い、Ward法による階層的クラスター分析を実施した。

#### 1. クラスター分析による5分類

分析の結果、次の5群に分類できると判断した（図3-1）。

- ・紙媒体中心群（a群）

本（紙媒体）による読書時間が長く、それ以外のツールによる読書時間が短い。

- ・スマートデバイス中心群（b群）

携帯電話、スマートフォン、タブレット等スマートデバイスによる読書時間が長く、それ以外のツールによる読書時間が短い。

- ・パソコン中心群（c群）

パソコンによる読書時間が特に長い。

- ・パソコン・スマートデバイス中心群（d群）

パソコンとスマートデバイスによる読書時間が長い。

- ・読書時間低群（e群）

すべてのツールによる読書時間が短い。

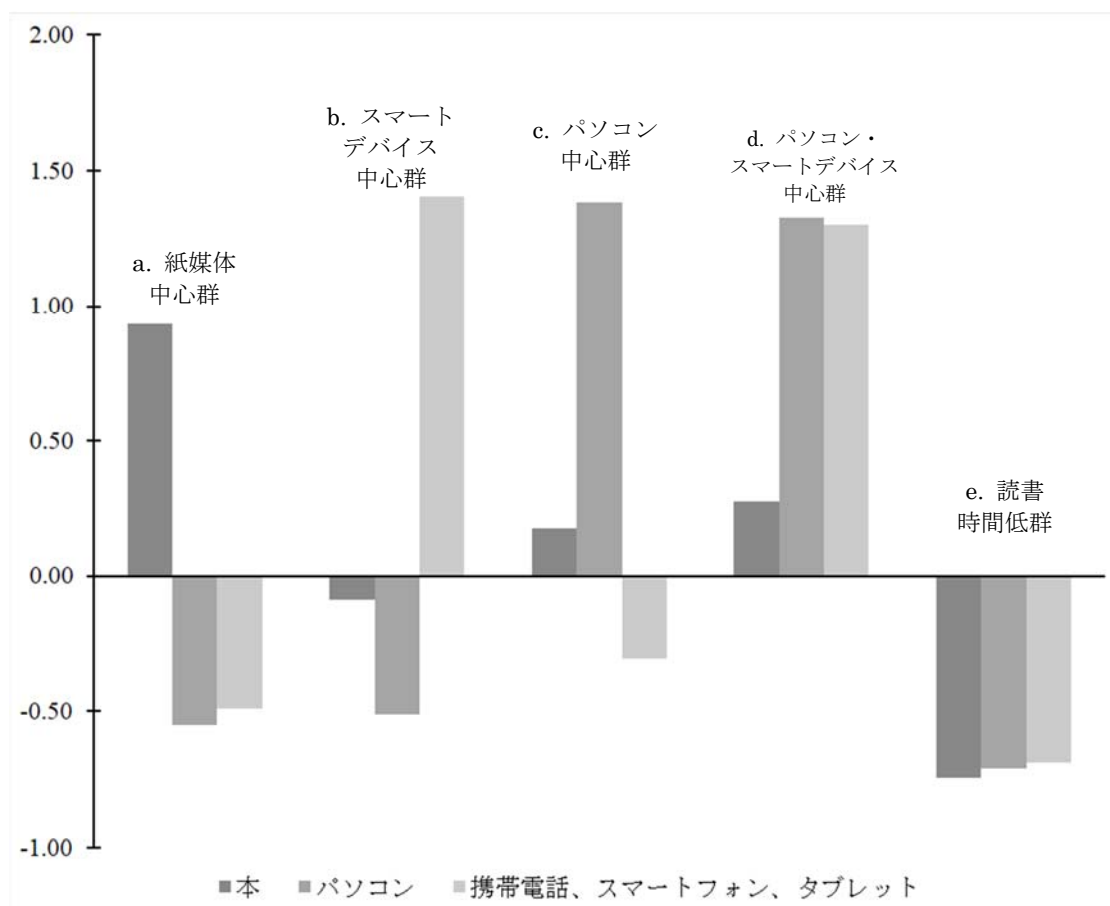


図3-1. 各クラスターの平均因子得点

(1) 各クラスターにおける男女差

表 3-1 より、a、c、e 群では、男女に大きな偏りは見られなかった。b 群は女性の割合、d 群は男性の割合が高かった。

表 3-1. クラスターと性別のクロス表

	性別		合計
	男性	女性	
a. 紙媒体中心群	533 (48.6%)	563 (51.4%)	1096 (100.0%)
b. スマートデバイス中心群	170 (34.3%)	326 (65.7%)	496 (100.0%)
クラスター c. パソコン中心群	331 (54.6%)	275 (45.4%)	606 (100.0%)
d. パソコン、 スマートデバイス中心群	565 (57.4%)	419 (42.6%)	984 (100.0%)
e. 読書時間低群	901 (49.6%)	917 (50.4%)	1818 (100.0%)

※n(クラスターごとの%)

(2) 各クラスターによる年代差

表 3-2 より、a、c 群は 60 代、b、e 群は 30 代、d 群は 20 代の割合が高かった。

表 3-2. クラスターと年齢階層のクロス表

	年齢階層					合計
	20代	30代	40代	50代	60代	
a. 紙媒体中心群	201 (18.3%)	180 (16.4%)	198 (18.1%)	239 (21.8%)	278 (25.4%)	1096 (100.0%)
b. スマートデバイス中心群	142 (28.6%)	145 (29.2%)	101 (20.4%)	61 (12.3%)	47 (9.5%)	496 (100.0%)
クラスター c. パソコン中心群	41 (6.8%)	53 (8.7%)	119 (19.6%)	158 (26.1%)	235 (38.8%)	606 (100.0%)
d. パソコン、 スマートデバイス中心群	212 (21.5%)	194 (19.7%)	201 (20.4%)	204 (20.7%)	173 (17.6%)	984 (100.0%)
e. 読書時間低群	404 (22.2%)	428 (23.5%)	381 (21.0%)	338 (18.6%)	267 (14.7%)	1818 (100.0%)

※n(クラスターごとの%)



## 2. クラスター×現在の意識・非認知能力

読書媒体（クラスター）を独立変数、年齢を共変量、現在の意識・非認知能力（自己理解力、批判的思考力、主体的行動力）を従属変数とした共分散分析を実施した（表 3-3）。

主効果に有意差が得られたため、Holm 法による多重比較検定を実施した。分析の結果、どの指標においてもクラスターの主効果が有意であった。また多重比較検定の結果、a 群、b 群、c 群、d 群における現在の意識・非認知能力が、読書時間が短い e 群よりも高かった。加えて、a 群の非認知能力は最も高い傾向がみられた。しかしながら、効果量は小さいため解釈には注意が必要であり、今後詳細な検討が必要であると考えられる。

表 3-3. クラスターによる現在の意識・非認知能力の違い

	a (n = 1096)	b (n = 496)	c (n = 606)	d (n = 984)	e (n = 1818)	統計値	多重比較 (効果量)
	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)		
自己理解力	14.02 (3.07)	13.48 (3.22)	12.98 (3.20)	13.51 (3.34)	12.26 (3.30)	$F(4, 4994) = 59.23, p < .001, \eta_G = 0.05$	a > b** ( $d = 0.17$ ) a > c*** ( $d = 0.32$ ) a > d** ( $d = 0.16$ ) a > e*** ( $d = 0.55$ ) b > c* ( $d = 0.16$ ) b < d ( $d = 0.01$ ) b > e*** ( $d = 0.38$ ) c < d** ( $d = 0.16$ ) c > e*** ( $d = 0.23$ ) d > e*** ( $d = 0.39$ )
批判的思考力	13.48 (3.20)	12.76 (3.34)	12.61 (3.42)	13.06 (3.38)	11.89 (3.34)	$F(4, 4994) = 44.95, p < .001, \eta_G = 0.03$	a > b*** ( $d = 0.22$ ) a > c*** ( $d = 0.26$ ) a > d* ( $d = 0.13$ ) a > e*** ( $d = 0.48$ ) b > c ( $d = 0.05$ ) b < d ( $d = 0.09$ ) b > e*** ( $d = 0.26$ ) c < d** ( $d = 0.14$ ) c > e*** ( $d = 0.22$ ) d > e*** ( $d = 0.35$ )
主体的行動力	13.11 (3.08)	12.55 (3.30)	12.41 (3.22)	12.89 (3.25)	11.58 (3.02)	$F(4, 4994) = 51.18, p < .001, \eta_G = 0.04$	a > b** ( $d = 0.18$ ) a > c*** ( $d = 0.22$ ) a > d ( $d = 0.07$ ) a > e*** ( $d = 0.49$ ) b > c ( $d = 0.05$ ) b < d ( $d = 0.11$ ) b > e*** ( $d = 0.31$ ) c < d** ( $d = 0.16$ ) c > e*** ( $d = 0.27$ ) d > e*** ( $d = 0.42$ )

a: 紙媒体中心群、b: スマートデバイス中心群、c: パソコン中心群、d: パソコン、スマートデバイス中心群、e: 読書時間低群

\*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$ , \*\*\*:  $p < .001$

## 第4章 考察

### 単純集計の結果

過去の調査より、大学生の読書冊数や読書時間が減少傾向にあることが報告されている（平山，2015）。また、小中高生も自分から進んで読書をしている者の割合は半数以下であり、その主な理由として読む時間がないことが挙げられている（株式会社創建，2019）。単純集計の結果、本の種類を問わず1ヶ月の読書冊数は年代に関係なく半数以上が0冊であった。したがって、本調査の結果は、時間がないことにより読書時間がなく、過去の調査と同様の傾向が得られたと考えられる。

クロスマーケティング（2017）は、紙媒体による読書をしている者の割合が、本を読む人の9割以上であることを報告している。本調査では、紙以外のツールを利用した1日あたりの読書時間は、年代により異なる傾向がみられた。紙媒体の場合、60代は読書時間が0分の割合が34%であるのに対して、それ以外の年代は40%を超えていた。60代の場合、紙媒体による読書活動に親しみがあるため、割合が少なかったと考えられる。20代、30代は、スマートフォンの個人所有率が最も高い（総務省，2018）が、本調査では、スマートフォンやタブレットのようなスマートデバイスを利用した読書は、20代において0分の割合が半数をきっていた。この結果は、スマートデバイスの個人所有率の上昇に伴い、読書のツールがスマートデバイスへ移行していることを示唆している。

近年、朝の読書活動など様々な読書活動を推進する事業が行われている。その結果、小中高生の読書実施率は50%より高いものの、年齢が高くなるにつれ、実施率は低くなることが報告されている（株式会社創建，2019）。本調査の結果、小学校の頃は年代に関係なく、本（紙媒体）を読んだ（とてもよく読んだ、よく読んだ、読んだ）割合は半数を超えていた。こうした背景には、読書活動を推進する取り組みなどの影響もあると考えられる。中学校時代は、30代を除き小学校の頃と同様の傾向がみられたことから、推進する取り組みの影響もあると考えられる。30代の傾向に関しては、今後詳細な検討が必要である。高校の頃は、20代から50代は、本（紙媒体）をあまり読まなかったとほとんど読まなかった割合が半数を超えていたことから、過去の調査と同様の傾向にあると考えられる。

### H25年度報告書を用いた経年比較

過去の調査より、読書をしない理由として、読書をする時間がとれないことが報告されている（株式会社創建，2019）。また近年、スマートデバイスの個人所有率の上昇が著しい（総務省，2018）。1ヶ月あたりの本（紙媒体）、マンガ、雑誌の読書冊数をH25年調査とH30年調査で比較した結果、年代に関係なく0冊の割合が上昇していた。一方、電子書籍の読書冊数の割合は、H30年においても半数以上が0冊であるもののその割合が減少し、H25年調査と比較して、1冊以上の割合が上昇していた。したがって、本調査の結果は紙媒体による読書冊数は、経年に伴い、読書冊数の減少傾向が強まっていると考えられる。その一方で、スマートデバイスを用いた読書がその個人所有率の上昇に伴い、普及し始めていると考えられる。

本（紙媒体）を用いた1日あたりの読書時間は、年代に関係なく0分の割合が上昇していた。この結果は、前述のように紙媒体での読書が減少していることを支持する結果であると考えられる。20代、30代はスマートフォンを中心としたスマートデバイスの普及率が著しい。40代以降、人の視力は落ちていくため、小さな文字を読み取ることが難しくなる。加えて高齢の場合、画面の拡大が可能なパソコンによるインターネット接続の割合が最も高い（総務省，2018）。パソコンを利用した1日あたりの読書時

間は、年代により異なり、20代、30代は0分の割合が増えている一方、40代から60代は減少していた。前述の通り、20代、30代はスマートフォン中心のため、パソコンを使用した読書時間が減少していると考えられる。40代以降は、加齢に伴う老眼などの影響を踏まえ、文字を拡大し読み取りやすくなるパソコンを利用するため、読書時間が上昇したと考えられる。

また、年代に関係なくスマートフォンなどのスマートデバイスの個人所有率は上昇している。携帯電話、スマートフォン、タブレットを用いた1日あたりの読書時間は、年代に関係なく0分の割合が減少していた。また、20代、30代は15分未満の割合も減少していた。この結果は、主要な利用ツールが変化していることに加え、20代、30代はスマートフォンで様々なことを行うため、上記の結果が得られたと考えられる。

### 読書媒体による現在の意識・非認知能力の違いの検討

文学読解において、読者は様々な感情を体験するが、先行研究では、体験した感情が読者に生じるカタルシスや自己理解の変容といった効果をもたらすことが示唆されている(e.g., Miall & Kuiken, 2002)。本調査は、年齢を統制した共分散分析の結果、読書時間が短い群に比べ、何かしらのツールを利用して読書を行っている群の自己理解力得点が高かった。したがって、本調査の結果は、先行研究で提示されている仮説を支持すると考えられる。しかしながら、本調査における読書をしている群が、具体的にどのようなジャンルを読書しているかまでは調査していない。今後はその点も考慮した上で、検討する必要があると考えられる。

本機構の過去の調査では、子供の頃に読書活動が多い成人ほど、「未来志向」、「社会性」などの現在の意識・非認知能力が高いことが報告されている(国立青少年教育振興機構, 2013)。脇野・角谷(2018)は、中学生を対象に批判的思考の一つである論理的思考と読書活動との関連を短期縦断的に検討した結果、両者に関連性がないことを報告している。本調査の分析結果では、読書時間低群に比べ、それ以外の群の批判的思考力得点が高かった。この理由として、脇野・角谷(2018)の研究は中学生を対象としているが、本調査は成人を対象にしているため、これまでの様々な読書経験により批判的思考力が高まった可能性がある。

濱田他(2016)は、本機構が過去に行った調査データをもとに、子供の頃の読書活動、成人期の読書活動と、主体的行動力に近い向上心を含めた意識・意欲・行動との関連を分析した結果、子供の頃の読書活動よりは関連が弱いものの、成人期の読書活動が正の関連を有していたことを報告している。本研究は、ツールを利用した読書時間との関連を検討した結果、ツールに関わらず、読書時間が長い者ほど主体的行動力が高いことが示された。したがって、本調査の結果は先行研究と類似した結果であり、ツールに関わらず読書活動が主体的行動力を高めることが示唆された。

### 総合考察

近年、成人の読書量の低下が懸念されている。本調査(速報版)では、現在の読書活動の実態を明らかにし、現在の意識・非認知能力との関連を検討した。分析の結果、紙媒体による読書冊数および読書時間の減少がみられた。一方、スマートフォンなどのスマートデバイスを利用した読書時間の上昇がみられた。また、年代により読書の実態が部分的に異なることも示された。加えて、紙以外のツールを利用した読書活動の違いによる現在の意識、能力を比較した結果、ツールに関係なく読書をしている者の

方が、そうでない者に比べ自己理解力、批判的思考力、主体的行動力が高かった。今後の読書活動の推進を考えた場合、引き続き紙媒体による読書の推進に力を注ぎつつ、スマートデバイスの個人所有率の高さを踏まえ、すでに行われている様々な電子メディア（パソコンを含む）を介した読書活動の推進が効果的であると考えられる。しかしながら、年代により読書活動の実態は部分的に異なるため、各年代に合わせたアプローチが必要であり、今後詳細に検討することが望まれる。

## 第5章 結論（おわりに）

本調査より、スマートデバイスの個人所有率の上昇に伴い、現在の読書活動が多様化しているものの、読書活動が活発な者の方が、現在の意識・非認知能力が高いことが示された。今後は、子供の頃の読書活動の実態を把握しつつ、現在の読書活動への持ち越し効果や現在の意識・非認知能力との関連を検証することに加え、実際の認知能力〔例えば、読解力（Arai et al., 2018）〕と読書活動との関連を検討し、読書活動の効果を多面的に明らかにする必要がある。そして、得られた知見から、今後の読書活動推進に向けた方策を検討していく。

## 文献

- Arai, T., Bunji, K., Toda, N., Arai, N. H., & Matsuzaki, T. (2018). Evaluating reading support systems through Reading Skill Test. *Proceedings of the 40th annual meeting of the Cognitive Science Society*, 100-105.
- Bavishi, A., Slade, M. D., & Levy, B. R. (2016). Chapter a day: Association of book reading with longevity. *Social Science & Medicine*, 164, 44-48.
- Cohen, J. (1988). *Statistical power analysis for the behavioral sciences* (2nd ed.). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Cohen, J. (1992). A power primer. *Psychological bulletin*, 112, 155-159.
- 株式会社クロスマーケティング (2017). 読書に関するアンケート (2017年版).
- Frey, B., Benesch, C., & Strutzer, A. (2005). Does watching TV make us happy? *Institute for Empirical Research in Economics University of Zurich Working Paper Series*, 241, 2-40.
- 濱田秀行・秋田喜代美・藤森裕治・八木雄一郎 (2016). 子どもの頃の読書が成人の意識・意欲・行動に与える影響 読書科学, 58, 29-39.
- 平山祐一郎 (2015). 大学生の読書の変化—2006年調査と2012年調査の比較より— 読書科学, 56, 55-64.
- Maniaci, M. R., & Rogge, R. D. (2014). Caring about carelessness: Participant inattention and its effects on research. *Journal of Research in Personality*, 48, 61-83.
- Miall, D. S., & Kuiken, D. (2002). A feeling for fiction: Becoming what we behold. *Poetics*, 30, 221-241.
- Jeffcoat, T., & Hayes, S. C. (2012). A randomized trial of ACT bibliotherapy on the mental health of K-12 teachers and staff. *Behaviour Research and Therapy*, 50, 571-579.
- 株式会社創建 (2019). 子供の読書活動の推進等に関する調査研究報告書 平成30年文部科学省委託調査.
- 経済産業省 (2018). 我が国産業における人材力強化に向けた研究会報告書.
- Mar, R. A., Oatley, K., & Peterson, J. B. (2009). Exploring the link between reading fiction and empathy: Ruling out individual differences and examining outcomes. *The European Journal of Communication Research*, 34, 407-428.
- 国立青少年教育振興機構 (2013). 子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究.
- Ritchie, S. J., Bates, T. C., & Plomin, R. (2015). Does learning to read improve intelligence? A longitudinal multivariate analysis in identical twins from age 7 to 16. *Child Development*, 86, 23-36.

総務省 (2018). 平成 30 年版 情報通信白書.

脇野信吾・角谷詩織 (2018). 中学生が科学読み物に触れることの意義—理科や読書への意欲と思考力・将来展望との関連から— 上越教育大学研究紀要, 38, 55-64.

Wang, M. & Wong, M. (2011). Leisure and happiness in the United States: Evidence from survey data. *Applied Economics Letters*, 18, 1813-1816.